

沖縄県平良市における活躍層の言語意識

——那覇市と対比して——

大野 眞 男*

(1999年6月9日受理)

1. 言語意識調査の概要

現代日本社会の言語状況は、規範としての標準語と撲滅対象の方言とが社会的に対立しているという、かつてのような構図にはない。標準語としての上からの規範性は薄れ、むしろマス・メディアの発達によりボトムアップ的に構築された共通語という国語認識の方が大きくなりつつある。その一方で、昔時の方言の土俗性も世代の交替とともにいよいよ薄れていくと同時に、かつての方言劣等意識というスティグマも今や地域アイデンティティーの拠り所と化しつつある^(注1)。

沖縄県においてはやや事情が複雑となってくる。那覇を中心とした沖縄本島南部においては、ウチナーグチ(沖縄方言)が退潮していくのと軌を一にして、ウチナーグチ(在来の方言)とヤマトゥグチ(本土の共通語)との間に第三のヴァリエティーとしてウチナーヤマトゥグチ(沖縄大和口)と呼ばれる中間方言が生成し、在来の方言を話せなくなった活躍層以下の若い世代において、かつての純粋方言に代わる座を占める認知を受けている^(注2)。このことは既に大野・外間(1995)・大野(1995)に報告した。

しかしながら、那覇を以て沖縄県を代表させるのは拙速であり、沖縄はなお懐が深い。一般に「沖縄」という語は、本土人から見ると全琉球と同義であるが、県居住者にとっては単に「沖縄本島」を指すに過ぎない。その先にはるばると広がる先嶋と呼ばれる島々に暮らす人たちが、どのような思いを抱いて言語生活を送っているのかを知らなければ、琉球を語って偏頗の誇りを逃れないであろう。那覇市の調査結果を全琉球的観点から補完するために、那覇の直接影響の少ない沖縄島以外の地域において、現地域社会を中心的立場で支えており今後の地域の言語生活の動向を左右する活躍層における言語意識と比較する必要のもとに本調査を実施した。

平良市の位置する宮古島は古来進取に気質に富む、アララガマ(なにくそ!という負けず嫌いの精神)に象徴される沖縄本島とは異なる個性の島である。この島に生まれこの島で暮らす25歳から40歳の男性、具体的には平良市教育委員会から紹介を受けた平良市職員32名の方々に、1996年1月から2月の間に通信調査の形で協力を得て、現在宮古島の文化を直接担っている活躍層の言語意識データを収集することができた。これを、規模の差異はあるものの過年度

* 岩手大学教育学部

収集分的那覇市の活躍層（那覇市役所職員・男性・54名）データ^(註3)と対比することで、宮古平良市における言語意識を立体的に把握することを試みた。

調査に当たっては、砂川道雄教育長をはじめとする平良市教育委員会の皆様に多大なご尽力をいただいた。また、ご紹介を受けた皆様には、年度末のお忙しい時期にもかかわらず、趣旨をご理解くださり煩瑣なアンケートにご協力いただくことができた。ここに記して深甚なる謝意を表する次第である。

2. 地域の言語ヴァリエティーに対する意識

地域に対して一般的にどのような意識を持っているかをまとめたのが表1である。沖縄県民の郷土意識は一般的に高く、特に本土の都市部と比較するとこの傾向は顕著である（佐藤ほか1995）。「地域が好きか」^(註4)の項目において、平良市是那覇市と同様に圧倒的に「好き」という回答が多く、「地域の文化を後世に残したいか」の項目でもほぼ同じ傾向が確認される。

表1 地域に対する意識（％）

	平良市	那覇市
地域が好きか		
好き	90.3	94.4
嫌い	3.2	5.6
どちらでもない	6.5	0.0
地域の文化を後世に		
残したいと思うか		
思う	90.6	100.0
思わない	0.00	0.0
どちらでもよい	9.4	0.0

この傾向は、言語バラエティーに関する評価においても同様であって、表2にまとめたように、地域の方言に対する「好き」の回答は平良・那覇ともに8割程度であり、「全国言語意識調査1995」の活躍層全国平均61.4%を上回っている。また、共通語に対する「好き」の回答率を圧倒的に上回っており、一般的に日本語の規範として想定されてきた共通語は、かつてステイグマであったはずの地域方言ほどには好まれていないという現況を示している。

もう一つ、宮古の人達は、那覇市を中心とする沖縄本島の言葉について、自分たちの方言ほど好感情を抱いていない。沖縄島の言葉に、決して自分達のアイデンティティーを託してはいないことがわかる。本土文化から見ると沖縄県は一まとまりに見えるが、琉球文化圏内部の視点においては、那覇を中心とする沖縄島の文化や言語が全琉球を代表するものではないことは明らかである。

宮古の人が、地域の方言、那覇を中心とする沖縄の言葉、本土の共通語を、それぞれどのように呼称しているかを以下に掲げる。なお、数字は回答数（無回答を除く）を示す。

〈宮古方言に対して〉

 ミャークフチ（ミャークウツ・ミヤコフツ）「宮古口」の意 23

 スマフツ（島口）の意 6

表2 方言・共通語等に対する好悪(%)

	平良市	那覇市
地域の方言が好きか		
好き	75.0	83.3
嫌い	0.0	1.9
どちらでもない	25.0	14.8
那覇を中心とした		
沖縄の言葉が好きか		
好き	46.9	—
嫌い	18.8	—
どちらでもない	34.4	—
共通語が好きか		
好き	37.5	53.7
嫌い	0.0	0.0
どちらでもない	62.5	46.3

宮古の方言 6

〈那覇を中心とする沖縄の方言〉

ウチナーフチ (ウクナーフチ・ウチュナーフツ・ウキナーフツ) 「沖縄口」の意 21

沖縄(の)方言 4

沖縄言葉 1

〈本土の共通語〉

ナイチフチ 「内地口」の意 10

ヤマト(ウ)フツ 「大和口」の意 7

共通語 6

標準語 3

ヤマトクトゥバ 「大和言葉」の意 2

普通語 1

日本語 1

基本的に宮古の人達は、自分たちの宮古方言をミャークフツ、那覇の言葉をウチナーフチ、そして本土の共通語をナイチフチもしくはヤマトフチのように、三極化して認識していることがうかがわれる。

図1~3は、地域の方言、那覇を中心とする沖縄の言葉(平良市のみ)、本土の共通語、の三つのヴァリエティーに対して、どのようなイメージを描いているかをまとめたものである。調査表段階のチェックリスト形式のデータ(思う1点/思わない0点)を平均化して示したものである。

図1から、宮古の人達の地域の方言に対する自己イメージとして、どちらかといえばプラスに当てはまる項目(「~である」といえる項目)としては「早口・荒っぽい・よい言葉・表現豊か・親しみがある・素朴・味がある・感情的」などである。これに対して、どちらかといえばマイナスに当てはまる項目(「~でない」といえる項目)は「丁寧・粘っこい・きれい・間伸びしている・汚い・野暮・悪い言葉・穏やか」などである。平良が那覇より高い数値を示してい

図1 地域の方言に対するイメージ

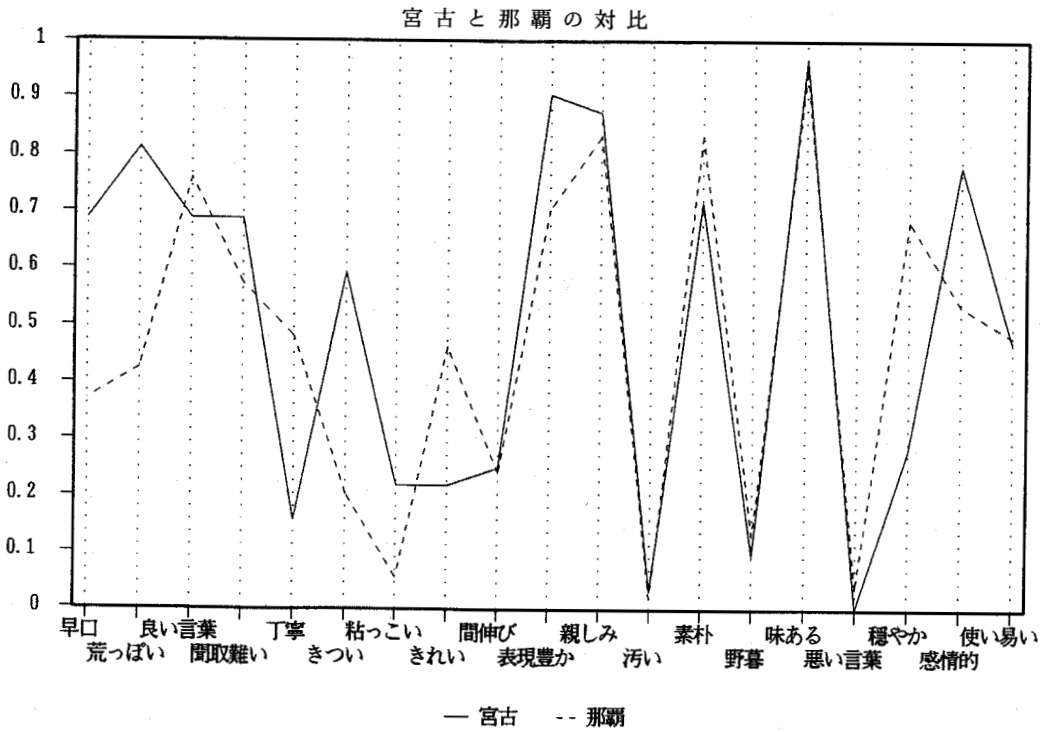
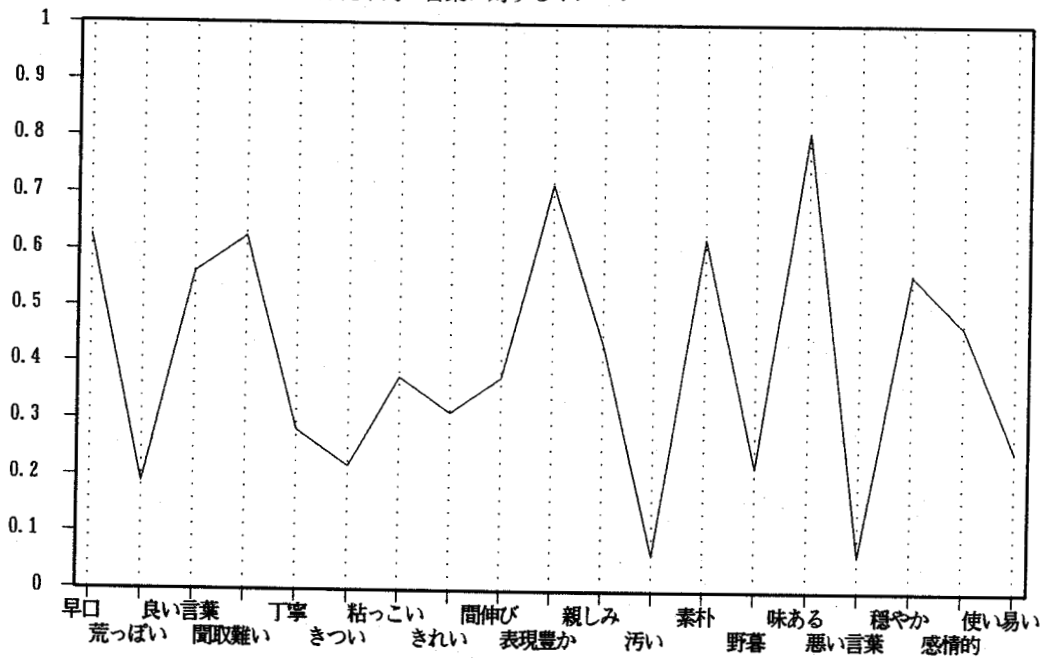


図2 那覇を中心とする沖縄本島の言葉に対するイメージ



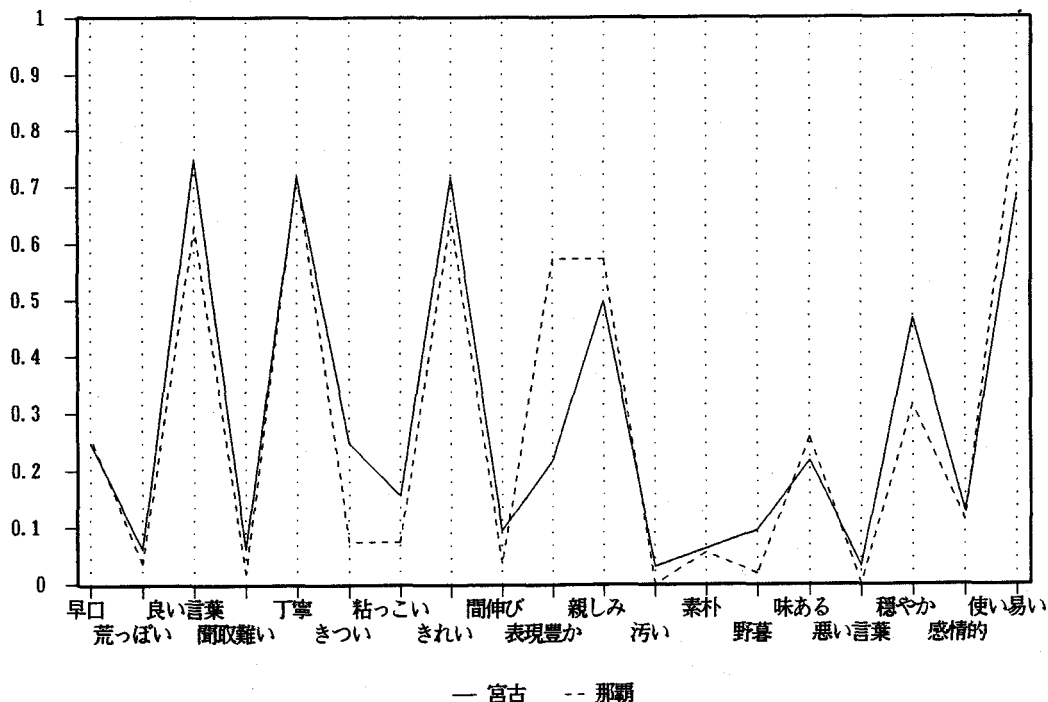
るのは「早口・荒っぽい・きつい・粘っこい・表現豊か・感情的」であり、那覇が平良より高い数値を示しているのは「丁寧・きれい・穏やか」である。ここでも宮古の人達の活動的な自己認識がよく現れている。なお、平良・那覇ともに地域の方言を「汚い・悪い言葉」とする評価は全く現れていない。

図2は、那覇を中心とした沖縄本島の方言に対して、宮古の人達の抱いているイメージを問うものである。どちらかといえばプラスに当てはまる項目（「～である」といえば項目）としては「表現豊か・味がある」などである。これに対して、どちらかといえばマイナスに当てはまる項目（「～でない」といえる項目）は「荒っぽい・きつい・汚い・野暮・悪い言葉・使いやすい」などであり、全体としては肯定的な評価となっている。これは、琉球文化圏で那覇・首里が持っている文化的権威による評価であろう。

図3は、宮古の人達が本土の共通語に対して抱いているイメージをまとめたものである。どちらかといえばプラスに当てはまる項目（「～である」といえる項目）としては「よい言葉・丁寧・きれい・使いやすい」などである。これに対して、どちらかといえばマイナスに当てはまる項目（「～でない」といえる項目）は「早口・荒っぽい・聞き取りにくい・きつい・粘っこい・間伸びしている・汚い・素朴・野暮・味がある・悪い言葉・感情的」などである。全体に機能性に対する評価が中心であり、それ以外の項目には特に目立った評価はない。また、平良市・那覇市で特に差異はない。

図3 本土の共通語に対するイメージ

宮古と那覇の対比



3. 方言に対する評価・態度

表3は、学校における方言矯正体験を問う項目である。平良も那覇も「学校で方言を矯正されたことがある」という回答は50%程度に達し、「全国言語意識調査1995」の活躍層全国平均(18.6%)と比べると、かつての沖縄県民への標準語励行運動にはやはり苛烈なものがあったことがうかがわれる。「方言矯正をどう思うか」の回答は平良と那覇ではやや異なる内容となっている。那覇では、方言矯正は「仕方ない」という肯定的な受けとめ方が6割近くになっているが、宮古では3割に達していない。

表4は、方言を笑われた体験を問う項目である。方言を使って「笑われたことがない」という回答が那覇では過半数であったのと同様に、宮古では「笑われたことがある」という回答が5割近くまで達している。那覇の人達の方言が少なくとも全体的には権威を持つものであり、また本土との関係においても接触の歴史が長く、かなり共通語に傾斜した言語生活が営まれているためであろう。宮古においては、言語生活が古くからの方言を中心に営まれていることが推察される。笑われたことを「恥ずかしかった」という回答が、那覇で0なのに対して宮古では13%存在し、「開き直った」という強い姿勢が、那覇で43%に対して宮古では20%しかないというも、宮古島の人達の言語生活が那覇の人達よりも共通語との距離が大きいことを物語っている。

表3 学校での方言矯正体験について (%)

	平良市	那覇市
学校で方言を矯正された ことがあるか		
ある	46.9	53.7
ない	37.5	31.4
覚えていない	15.3	14.8
(「ある」の回答者中)		
方言矯正をどう思うか		
良い	0.0	0.0
ためになった	6.3	10.3
仕方ない	28.1	58.6
思う	6.3	17.2
思わない	9.4	10.3
どちらでもよい	9.4	10.3

表4 方言を笑われた体験について (%)

	平良市	那覇市
方言を使って笑われた ことがあるか		
ある	45.5	16.7
ない	38.4	53.7
覚えていない	15.2	29.6
(「ある」の回答者中)		
笑われたことをどう思ったか		
恥ずかしかった	13.3	0.0
腹がたった	20.0	14.3
何とも思わなかった	40.0	42.9
開き直った	20.0	42.9
その他	6.7	0.0

表5は、自分の言葉や発音に方言的特徴があるかを問う項目である。平良・那覇ともに方言的特徴を認める回答が圧倒的だが、「かなりある」という回答になると那覇より平良の方が多くなっている。また、方言的特徴があることについて、肯定的に「良いことだ」とする回答は、那覇の15%に対して平良では40%近くに上る。このことは、宮古の言語生活が那覇より在来の方言に近いものであると同時に、そのことを決して否定的には捉えない強い個性を宮古の人達が持っていることを示している。

表5 自分の言葉の方言的特徴について (%)

	平良市	那覇市
自分の言葉に方言の特徴があると思うか		
かなりある	40.6	29.6
少しある	46.9	57.4
全くない	3.1	1.9
昔から共通語	0.0	3.7
わからない	9.4	7.4
〔「かなりある」「すこしある」の回答者中〕		
自分の言葉に方言の特徴があることをどう思うか		
良いことだ	39.3	15.2
残念だ	3.6	6.5
仕方がない	17.9	28.3
何とも思わない	38.3	50.0

表6は、全国放送のテレビのインタビューに地域の方言で答える人が出てきたらどう思うかについて、該当選択肢をすべてマークする項目である。平良も那覇も、地域の方言を使用することが「自然でよい」「興味を感じる」という肯定的な評価が主流となっている。

表7は、地域の方言が将来どのように変わっていくかに関して問う項目である。子孫にはどのような言葉を使ってほしいかという問いに対して、平良・那覇ともに圧倒的多数は「方言と共通語を使い分ける」という態度である。これは、「全国言語意識調査1995」による活躍層全国平均(57%)よりかなり高い数値であり、沖縄県において場面に応じた方言と共通語の使い分けが少なくとも活躍層においては相当程度支持されていることを示している。方言を後世に残しておきたいかを問う項目に対する「残しておきたい」という回答も、平良・那覇ともに活躍層全国平均(63.3%)より高い数値であり、沖縄県民の地域の方言に対する愛着をうかがわせる。

表6 テレビのインタビューで地域の方言を話す人が出たら (%)

	平良市	那覇市
滑稽だ	18.8	11.1
嫌な感じ	0.0	1.9
共通語を使うべきだ	25.0	18.5
恥ずかしい	18.8	3.7
興味を感じる	37.5	50.0
自然でよい	65.6	51.9

表7 方言の将来について (%)

	平良市	那覇市
子孫にはどんな言葉を使ってほしいか		
共通語のみ	0.0	0.0
方言と共通語を使い分ける	87.1	90.6
方言のみ	3.2	0.0
どちらでもよい	9.7	7.6
わからない	0.0	1.9
方言を後世に残しておきたいか		
残しておきたい	87.5	98.2
なくなってほしい	3.1	0.0
どちらでもよい	9.4	1.9

4. 共通語に対する評価・態度

表8は共通語教育に関してまとめた項目である。学校での共通語教育は必要かの問いに対して、平良・那覇ともに2/3以上が「必要だ」と判断している。共通語教育の必要性について「全国言語意識調査1995」で「必要だ44%」「不必要だ40.4%」と拮抗しており、若い世代で「不必要だ」が逆転していく趨勢を考えると、これはかなり高い数値と言わなくてはならない。琉球諸方言と本土の共通語との差異が大きいため、沖縄の活躍層はやはり共通語教育が不可欠と考えている。

共通語習得の際の手本は何であったかの問いに対して、最も高い数値を示すのは平良・那覇ともに電波によるマスメディアの「テレビ」である。那覇と対比して平良では「教師」を手本にしたという数値が低く、「書物・教科書・新聞」という活字メディアを手本にしたという数値が高い。これは、宮古の教育が那覇ほど中央に指向したものとなっていないことを示しているのではないか。

共通語と方言の使い分けに関する問いに対して、「はじめがあって良い・当然だ」という肯定的回答合わせると平良で65.7%であり、「全国言語意識調査1995」の活躍層全国平均(43.3%)比べるとかなり高い数値になっている。宮古の言語生活は方言と共通語をTPOに応じて使い分けるべきだという規範意識により営まれていることになる。

那覇では49%で全国平均にやや近い。これには、大野・外間(1995)・大野(1995)で論じたように、那覇では方言と共通語の間にウチナーヤマトゥグチという中間方言ヴァリエティーが

表8 共通語教育について(%)

	平良市	那覇市
学校で共通語教育は必要か		
必要だ	68.8	66.7
必要ない	31.3	25.9
わからない	0.0	7.4
あなたの共通語の手本は何か		
家族	31.3	31.5
知人・親戚	6.3	13.0
教師	12.5	31.5
書物・教科書・新聞	43.8	24.1
テレビ	46.9	64.8
職場の人	6.3	5.6
共通語と方言の使い分けを どう思うか		
はじめがあってよい	31.3	26.4
当然だ	34.4	22.6
仕方ない	9.4	17.0
何とも思わない	21.9	30.2
不自然だ	3.1	1.9
不必要だ	0.0	1.9

発達しており、截然と方言と共通語を使い分けるといふより、両者を融合する方向に言語変化が向っていることを反映していると考えられる。

表9は、共通語を話す自信があるかを問う項目である。「自信がある・少しある」を合わせると、平良で78.2%、那覇で68.5%と、実態はともかく意識の上ではともに2/3以上が共通語能力に自信を持っていることになる。共通語を話す自信がないことを「何とも思わない」という回答は平良・那覇ともに多く、共通語能力の自信がなくとも直ちにいわゆる方言コンプレックスへと直結しているわけではないことがわかる。

表9 共通語を話す自信について (%)

	平良市	那覇市
共通語を話す自信があるか		
ある	34.4	25.9
少しある	43.8	42.6
あまりない	15.3	24.1
全然ない	3.1	0.0
わからない	3.1	7.4
(「あまりない」「全然ない」の回答者中)		
共通語を話す自信がないことをどう思うか		
恥ずかしい	0.0	15.4
残念だ	0.0	38.5
仕方ない	33.3	15.4
何とも思わない	50.0	30.8
わからない	16.7	0.0

図4は、宮古の人達が共通語・宮古方言・沖縄の言葉を場面やTPOに応じてどのように使い分けられるかを問う項目である。「同郷人と地元で・同郷人と那覇で・同郷人と東京で^(注5)」の三場面は、いずれも8割方の人達が「宮古方言」で話をするを回答しており、話し相手が宮古の同郷人であれば、どんな場所であろうと宮古方言を用いるという顕著な傾向を示している。これに対して、話し相手が共通語を話す人物である場合には、どんな場所においても共通語で話すことも明らかである。興味深いのは、沖縄本島の人に対して、決して方言ではなく、共通語をもって対応していることである。宮古の人たちにとって、那覇などの沖縄本島は、共通語を使用すべき外側の世界として認識されているということではないだろうか。テレビなどのマスメディアについても、県外のみならず県内放送でも共通語を使用すべきであると認識されている。

表10は、場面差に応じた使い分けを平良と那覇で比較したものである。両地域ではっきりとした差異が生じるのは「地元の知人(＝同郷人)と東京の電車の中で」の場面である。那覇で共通語と方言使用が拮抗しているのに対して、宮古の人たちは上述のようにはっきりと方言使用に偏っている。宮古の人達が、都市化された沖縄本島那覇周辺の人達より同郷意識が強く、そのことが言語行動にも反映されやすいことを物語っている。

図4 場面差に応じた言葉の使い分け

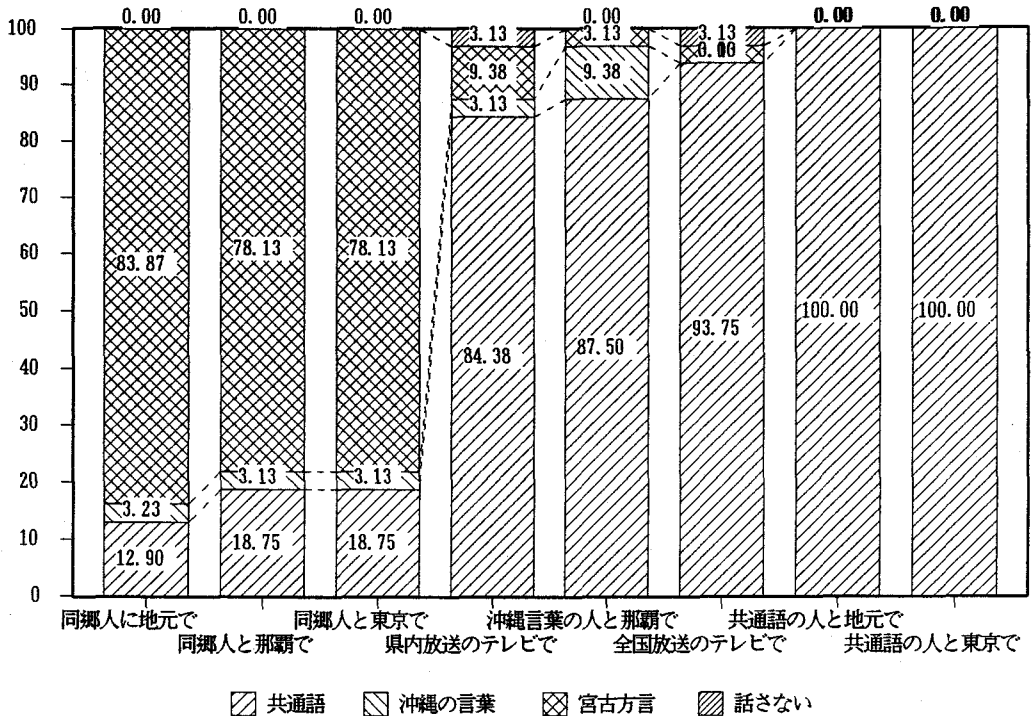


表10 共通語・方言使用の場面差

	平良市		那覇市	
	共通語使用	方言使用	共通語使用	方言使用
地元の知人と	12.9	83.8	28.6	71.4
地元の道端で				
地元の知人と	18.8	78.1	47.2	52.8
東京の電車の中で				
全国放送のテレビの	93.8	3.1	98.1	1.9
インタビューで				
共通語を話す見知らぬ人と	100.0	0.0	98.1	1.9
地元の道端で				

5. 中間方言形に関して

琉球方言圏においては、本土方言との歴史的距離の大きさから、標準語受容の過程において本土方言と琉球方言との間にウチナーヤマトゥグチと呼ばれる中間方言ヴァリエティーを生成してきたことは既に述べた。かつては誤って習得された標準語形という認識^(注6)であったが、近年に至り在来の方言が退潮していくにつれて、那覇周辺の若い世代ではむしろ本土文化や共通

語に対して自分たちのアイデンティティーの拠り所としてとらえられていることは大野(1995)に述べた。那覇から海上遙かに隔たった宮古においても中間方言が存在することは同様であるが、それらに対してどのような使用意識が持たれているかを、那覇の場合と対比して示したのが表11である。

「食べてしまった」ことを在来の平良方言ではファイヤーニャーンのように「食べる」の意の動詞の連用形ファイーに、「てしまった」の意の助動詞ニャーンをつけて表現する。那覇方言でもカディネーンのように、動詞連用形カディに助動詞ネーンを付けて表現する。このニャーン(那覇ではネーン)が、「無い」の意の形容詞としても用いられるため、ファイヤーニャーンを共通語形に直訳したものが「食べてない」という語構成である。那覇ではこのような言い方は、上述したようにウチナーヤマトゥグチと呼ばれ、伝統的な方言と標準語の間に生まれた中間方言として特に若い世代において市民権を獲得しつつあり、活躍層でも半数の人が自分でも使うと回答している。これに対して、宮古の人達では20%以下にとどまり使用意識は高いとは言えない。

共通語の「借りましょう」は、動作主が話し手であれば〈意志〉を、聞き手であれば〈勧誘〉

表11 中間方言形について(%)

	平良市	那覇市
ご飯を食べたかと聞かれて、 すでに食べてしまったとき、 「食べてないさー」と答える。		
はい	18.8	50.0
いいえ	81.2	50.0
誰かに電話を借りようとするとき、 「電話借りましょうね」と言う。		
はい	65.2	88.9
いいえ	34.8	11.1
「行くことができる」ことを 「行ききれる」という。		
はい	15.6	42.6
いいえ	84.7	57.4
「行かなければならない」ことを 「行くべき」と言う。		
はい	65.6	—
いいえ	34.4	—
「ここに置いた」を強調したとき、 「ここにが置いたさー」と言う。		
はい	43.8	—
いいえ	56.2	—
「来るはず」と言ったら どのような意味か。		
必ず来る	9.4	7.4
もしかしたら来ない	78.1	79.6
たぶん来ない	12.5	13.0

を表す。ところが、中間方言であるウチナーヤマトゥグチで「借りましようね」というと、〈勧誘〉にはほとんど用いられず、もっぱら聞き手と関係なく話し手が動作を行う〈意志〉を一方的に表している。これは沖縄ネイティブの言語共同体において、話し手・聞き手の関係が対立的でなく、むしろ広く身内の仲間意識に支えられた言語運用が行われてきた結果を反映したものであろう。那覇ではほとんどの人がこの表現を用いるが、宮古では2/3程度である。

「行ききれるよ」は本来のウチナーグチにない言い方である。九州地方の能力可能表現「行ききる」に通じる表現だが、さらに可能動詞化している点が異なっている。どのような経緯でこのような言い方が生まれたか不明だが、いずれにしても中間方言として位置づけてよかろう。那覇では4割程度が使用意識を持っているが、宮古では15%にとどまる。このように、那覇では中間方言形がウチナーヤマトゥグチという新たなヴァリエティーとして認知されるまで使用意識が高いが、宮古ではそのような一般化が那覇に比べて立ち遅れていることが窺われる。

宮古において、〈義務・当然〉を表す旧来の表現はイキグマタであるが、これを「～しなければならぬ」という連語形式ではなく、「～べき」という助動詞形式に直訳した中間方言形が「いくべき」という言い方である。この言い方が那覇にあるかどうか不明だが、宮古では2/3以上が一般的に用いている。

「ここに置いた」を強調して言うときに「ここにが置いたさー」のようにいうことが宮古では多い。これは、琉球方言一般に係助詞ドゥが用いられており、この助詞のもつ強調的な意味合いが共通語の中のガ助詞に添加されて表された中間方言的表現が「ここにが」という言い方である。実際はもっと多用されていると思われるが、意識としては4割程度が使っていると回答している。

宮古方言でキッシュパジツ、那覇方言でチュールハジという在来の方言は、ともに共通語に直訳すれば「来る筈」という語構成に相当しており、意味的には共通語と異なって〈当然〉ではなく〈推量〉の意に用いられている。このことから、中間方言形としての「来るはず」という共通語直訳形は、実は「来るだろう」という程度の〈推量〉の意をもって使用されている。平良・那覇ともに、9割近くの人達が〈推量〉の意で受けとめていることがわかる。

このような中間方言に対して、那覇周辺ではウチナーヤマトゥグチ（語構成は「沖縄大和口」という呼称が与えられている。また、奄美諸島においても同様の中間方言に対しトン普通語（トンとは薩摩芋のこと）という呼称が見られる。これに対して、宮古でこのような中間方言形の集合に言語ヴァリエティーとして「名称がある」と回答した人はわずか2割程度にとどまる。沖縄本島のウチナーヤマトゥグチとくらべて、その使用実態の総体的な低さと同様、宮古の言語社会における中間方言としての認知度も低いことが察せられる。「名称がある」という回答の具体的な名称は以下にあげるようなものであり、宮古の中心地である平良市の名が冠せられているのが特徴的である。これは旧来の宮古方言が、ミャークフツであるのに対して、新たなヴァリエティーであることを「ピサラ」という宮古の中心地の地名を用いて示唆的に表したものと考えられる。なお、数字は回答数（無回答を除く）を示す。

ピサラフツ（ピサラウツ） 6

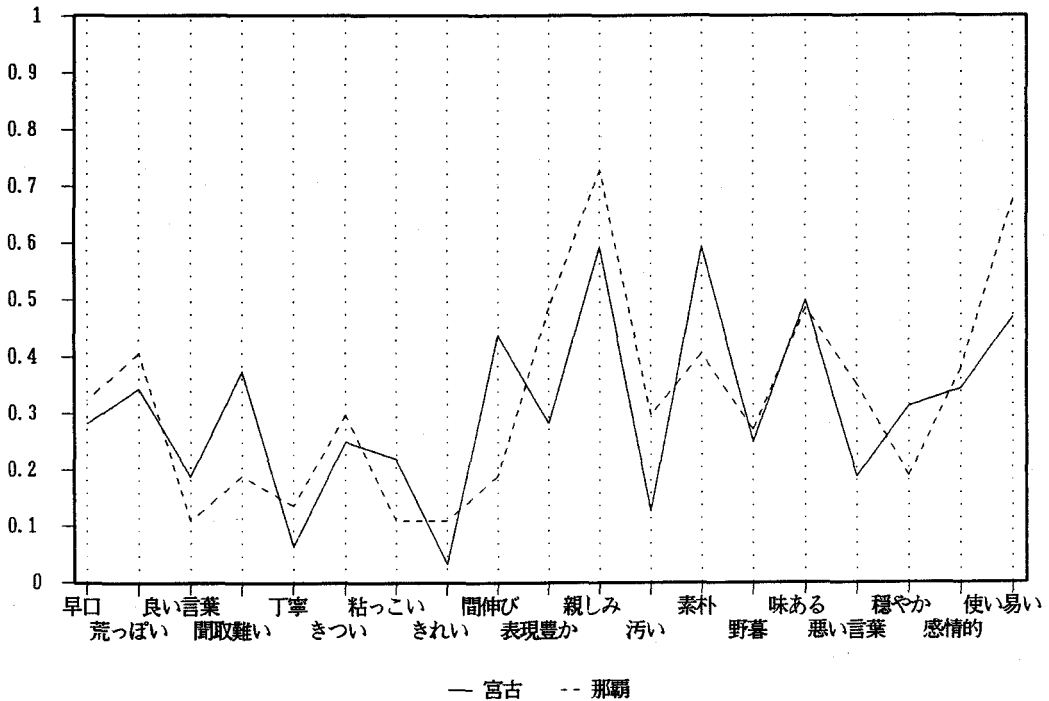
宮古共通語 1

ウチナー標準語 1

宮古の人達および那覇の人達が、地域固有の方言と共通語との間に形成された中間方言に対して抱いているイメージを問うたのが図5である。宮古の人達の中間方言に対する評価は、ど

図5 中間方言に対するイメージ

宮古と那覇の対比



ちらかといえばプラスに当てはまる項目（「～である」と言える項目）は「間伸びしている・親しみがある・野暮・味がある・使いやすい」などである。これに対して、どちらかといえばマイナスに当てはまる項目（「～でない」と言える項目）は「丁寧・きれいな」などである。

宮古が那覇より高い数値を示した項目は、「聞き取りにくい・間伸びしている・素朴・粘っこい・感情的」であり、那覇が宮古より高い数値を示しているのは、「表現豊かな・親しみやすい・汚い・使いやすい」である。全体に、宮古より那覇の方が中間方言に積極的なイメージを与えており、中間方言に対する認知度の高さを示しているものと考えられる。

（本稿は1996・1997年度文部省科学研究費補助金「基盤研究C(2)課題番号08610520」による成果の一部である。）

注1) 標準語・共通語・方言に対する言語意識の全国的動向については、佐藤和之氏（弘前大学）の呼びかけにより1994年に行われた、全国14地点における三世代にわたる言語意識調査（対象者2,800名）により明らかにされている。この調査の結果の概要は、佐藤ほか14名（1995）、米田（1997）に報告されている。以下、この時の言語意識調査データを「全国言語意識調査1995」と略称する。

注2) 中間方言の生成について、Trudgill (1986. p.62) は、interdialect forms が集合化することが新たなヴァリエティーとしての new dialect の形成の重要な契機となるとしている。そのような意味で、ウチナーヤマトゥグチを中間方言として説明したものに陣内（1995）、Matsumori

(1995)がある。また、このような中間方言の形成過程は、真田(1990)の言うネオ・ダイアレクトの形成過程にほぼ相当すると考えられる。

注3) 那覇調査の概要については大野・外間(1995)参照

注4) 表1中の「地域」に対して、平良市調査では「宮古」という地域名を、那覇市調査では「沖縄」という地域名を、それぞれ調査表段階では用いた。行政区画上の市町村名より端的に彼らの地域アイデンティティーを表現するためである。

注5) 調査表段階では、同郷人とは「地元の知人」、東京とは「東京の電車の中で」というより具体的な場面設定をしている。

注6) 沖縄学の父と仰がれる伊波普猷の上京時の思い出として、「自分たちが使っている大和口が、借り物であることをしみじみと感ぜざるを得なかった。」(「琉球と大和口」昭和五年『伊波普猷8』所収)と感慨している。当時の若い世代の言語実態は、十全な標準語とはほど遠く、大いにウチナーグチが干渉したヤマトグチであったことだろう。「従って、琉球語の単語は、日本語のにすげえられ、その音韻・語法さては言いあらはしまで、日本的になったことは、今の若いものが操ってある沖縄口を、六七十位の老人が了解することが出来ないのを見てもわかる。」(同上)という、なんとも煮えきらない観察も、まさにウチナーグチとヤマトグチの間に自ずと中間ヴァリエティーが生成しかけているプロセスと見ることもできよう。伊波は当時の教育誌『沖縄教育』で標準語について啓蒙した末尾に「誤用語」として興味深い文例をあげている。「私にやれ(よこせ)、太い船(大きい)、車から行く(車で)、面白い話しても長くなるとあきれる(あきる)、明日は君の内に来ようね(行かう)、下駄をふむ(はく)、毎日あんな風です(いつも)」「(「声光学大意」明治四十五年『伊波普猷全集8』所収)である。これらは伊波により「誤用」とされているが、いずれも基盤にあるウチナーグチの意味・用法に干渉されて不十分に習得されたヤマトグチ語形である。すなわち、今日一般に「ウチナーヤマトグチ」と通称される中間方言が明治末に既に生成され、当時は誤用と認識されていたわけである。

参考文献

- 大野眞男 1995 「中間方言としてのウチナーヤマトグチの位相」『変容する日本語』(月刊言語別冊 24-12)
- 大野眞男・外間美奈子 1995 『ウチナーグチ(沖縄方言)に対する意識調査報告』(岩手大学教育学部国語学研究室)
- 陣内正敬 1995 「中間方言の実態」(月刊言語 24-2)
- Matsumori, A., 1995 Ryukyuan: Past, Present and Future, *Multilingual Japan*.
- 真田信治 1990 『地域言語の社会言語学的研究』
- 佐藤和之ほか 1995 『変容する日本の方言』(月刊言語別冊 24-12)
- 佐藤和之・米田正人編 1999 『あなたは共通語が好きですか?』
- Trudgill, P., 1986 *Dialect in Contact*.
- 米田正人 1997 「二十世紀末日本人の言語意識 1~12」(月刊言語 26-1~12)